

## この本の内容と特徴、その応用 … 指導者の方へ

この本は、数千万年前、十勝の大地ができることから、人が暮らし、開拓が進み、発展してきた現在までの川の歴史を描いています。川の歴史とはいいながらも、それぞれの時代を表現するため、川とは離れた視点の記述も多くあります。

十勝の川について、そして十勝の自然や文化の成り立ちについて、まとめて学ぶことのできる「十勝の歴史入門」の決定版です。

### どこから見ても

気が向くままに、ページを開いてみてください。基本的に、どのページから読み始めても内容が理解できるように、作成してあります（そのため、内容には重複があります）。また、ほかのページに関連事項がある時には、そのページ番号が入れています。

### 生きた社会科に

この本では、単なるできごとを述べるだけでなく、できるだけそれぞれの時代を生きた「人」の暮らしを描くようにしています。本州中心の「日本史」とは大きく異なる歴史をつくってきた、郷土の先人たちの「生き方」を知ることこそ、生きた歴史を学ぶことになるのではないのでしょうか。

### 生きた理科に

この本では、人間の歴史だけではなく、「大地の歴史」から述べています。大地の動き、そして古代生物たち（の化石）は、決して本や映像の中にあるのではなく、今私たちの目の前にあり、身近に隠れているのです。

いつも登る坂道や毎年作物が育つ畑の土は、地球の力や川の力でつくられてきたものです。あるいは、数百万年も昔の生き物の化石を、誰もがみつけることができます。

また「考古学」は、遺跡を調べ、発見された土器や石器といった遺物などを科学的に分析することで、大昔の人の暮らしを探っていきます。理科と社会科の先に「ロマン」が待っている学問なのです。

### 「環境」を学ぶ

伝統的なアイヌ文化、あるいはそれ以前の文化の中で生きていた人たちは、自然とともに暮らしていました。彼らは自然をこわしてしまっただけで生きていけません。そんな彼らが、自然に対してどのように考えていたのか、そして、どのように向かい合い利用していたのかを知ることは、観念的な自然保護ではない、環境問題への深い理解につながることでしょう。

### 「国際理解」をする

お互いのことを知り合うことこそ、本当の理解です。外国の人に自分たちのことを伝えることも、重要な国際理解なのです。まず、私たちの社会の成り立ちを知りましょう。

また、北海道では、本州とは別の民族文化が花開いています。各地からの移住者もたくさんいます。身近にある様々な文化を知

り、理解することは、そのまま国際理解への第一歩となります。

さらに、アイヌ文化期以前に北海道にすんでいた人々は、本州と交易をおこなっていた上に、サハリンを通じて、北の大陸ともつながりを持っていました。北海道に「日本国」というくくりのなかった時代、今以上にダイナミックな国際交流があったのです。

### 「地域産業」を学ぶ

現在発展した十勝農業も、開拓者たちの血のにじむような苦勞の末に花開いたものです。また、その努力の結晶である作物は、何万年もかけてできてきた土で育っています。

また、川での漁は、大昔からおこなわれてきました。しかし、毎年秋にもどってくるサケたちは、一時期とても少なくなっていました。そこには多くの悲劇があり、そして新たな技術へのチャレンジがありました。

### 身近で、具体的な例

歴史はただのできごとではなく、今、目で見て手で触れ耳で聞くことのできるものを調べることで、つくられていくものです。

この本では、各項目に関して、できるだけ具体的な例を載せるようにしています。必ずしも、誰もが体験できることではなく、もう見ることができなくなった例もありますが、実際に五感を使って「触れる」ことで、少しでも歴史を「実感」していただけたら、と考えています。

本来ならば、十勝（の川）全体の例を載せられるといいのですが、どうしても、十勝川中流域を中心とした記述になってしまっています。身近な例が載っている時には、現地で本物を見るためのガイドとして、また、身近な例がない場合には、応用の手助けとして、それぞれ利用していただけたらと願っています。

### 「歴史」は変わる

「歴史」は、新しい発見があったり、新しい考え方ができると、変わることがあります。ここ数年の十勝や北海道でも、いくつかの新しい発見や研究成果の発表がありました。

この本の作成に当たっては、現在も研究を続けておられる方々にアドバイスをいただき、ある程度新しい知見に基づいた情報を入れるようにしていますが、歴史が書き換えられることで、この本の内容が古くなっていくかも知れません。

### 過去を知る = 未来を創る<sup>※1</sup>

第5章「5. まとめにかえて」でも触れていますが、過去を知るといことはこれからを考える上で、とても大切なことです。

私たちの生きる社会は、めまぐるしく変化していく一方で展望を見出しにくい状況になっています。過去をふり返ることは、決して現在から目をそらすことではなく、これから先をどう創っていくかのヒントを探ることであり、過去のできごとにおける原因と結果を知り、シミュレーションをおこなうことでもあります。

未来へ踏み出す時、この本が小さな手助けとなれば幸いです。

※1 過去を知る=未来を創る(かこをしる=みらいをつくる)：孔子(こうし：紀元前6～5世紀の中国の思想家)の有名なことばにも「温故知新(おんこちしん：ふるきをたずねて新しきを知る・ふるきを温めて新しきを知る)」がある。